NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター
2024年９月号［季刊発行］

ここから これから

からから便り

Vol. 2

もくじ

- 帰ってからのよりどころ
- それぞれの「ここから」物語
- 寄稿「１ページのたより」
- 各相談窓口
- 北海道における被災避難者の受入状況
- 編集後記

帰ってからのよりどころ

NPO法人ビーンズふくしま「ままカフェ」　三浦恵美里さん

福島市に拠点があるNPO法人ビーンズふくしまの活動は、1999年9月のフリースクール設立にはじまります。

以来ずっと子どもや若者、子育て支援を軸に活動を続けています。今回「帰ってからのよりどころ」としてご紹介するのは、ビーンズふくしまが運営する「ままカフェ」です。

「ままカフェ」は避難先から戻ってきたママたちが、安心して話ができる場所を、と2013年にスタートしました。担当している三浦恵美里さん（写真左）も、2人の子どもと秋田県へ母子避難をした経験があります。

三浦さんが避難をしていた秋田県では、早い段階で県が個別相談員を配置し、秋田県内に避難した方々への定期的な個別訪問を行なっていたそうです。

「何も知らないところに子どもたちとポン、と行ってしまい、わからないことばかりでアパートに閉じこもっていました。でも、相談員として訪問してくれた方も同じように避難をしてきた方で、同じ境遇の方と話せて元気が出たし、落ち着いたんです」

こうして月に一度の訪問を受けて1年ほど経ち、相談員になることを勧められた三浦さん。もともと、保育士として働いていた経験と、人と話すことも好きだったことから、相談員として訪問やサロンの運営に携わりました。そして、そのサロンでビーンズふくしまのスタッフと知り合ったことをきっかけに、帰還後、「ままカフェ」の運営にたずさわることになったそうです。

お話を伺って、秋田で三浦さんが経験した「安心して話ができることの大切さ」が、「ままカフェ」につながっているのだと感じました。

「最初『ままカフェ』は、避難先から戻った方を対象に始まりましたが、時が経つ中で、転勤や結婚で福島にきた方や、避難をしていないけど『ままカフェ』のみんなと話がしたい、と参加を希望する方が出てきて、2016年からは門を広げ、福島に暮らすお母さんたちはどなたでも参加できる場にしていきました。頭の中では心配なことがあるけれど普段の生活ではちょっと聞きにくいな、福島ではタブーなことを言ってしまったかな、と不安に思うことも気兼ねなく話せる場所になっています」

最近は、避難をしていた子どもたちがママとなって参加したり、大学生や成人した子どものお母さんが参加したり。「これから帰ってくるお母さんや当時の子どもたちが親になることを思うと、こうして安心して話せる場所ってずっと必要ですよね」と三浦さん。

「ままカフェ」は今、県内浜通り、中通りの12ヶ所でほぼ定期的に開かれています。カフェの開催情報はインスタグラムで発信中。これまでのことも今のことも、気兼ねなく話せるよりどころとして、ぜひフォローしてみてください。

かわいいイラストがいっぱいの、遊び場ポイントをまとめた冊子や、ままカフェのパンフレットをいただいてきました。

カフェ開催情報は、インスタグラムで配信中です。QRコードからチェックしてみてください
（ID：mamacafe_beans）

「ままカフェ」に関する問合せ
NPO法人ビーンズふくしま
ふくしま母子サポートネット
電話：024-573-0150

それぞれのここから物語

《富良野市・東川町編》

前回からスタートした〈それぞれの「ここから」物語〉。今回も新聞記事を元にたどりつつ、関係者にお会いしてきました。

（参照：どうしんDB）

富良野市編

2011年4月12日、福島県内の新聞に、脚本家倉本聰さんから「福島県のみなさんへ」というメッセージが掲載されました。

メッセージには、倉本さん自身が第二次世界大戦中に学童疎開し、疎開先で子ども同士が支え合い、絆や友情が芽生えた経験をしたことから、「被災学童集団疎開受け入れプロジェクト」を立ち上げたことが書かれていました。そして、期間の長短を問わず、学校や地域、親しいサークルなどの単位で、子どもたちを北海道富良野へ疎開させてはどうか、と呼びかけていました。

「暮しステーション」は、ドラマ「北の国から」に登場した喫茶店「くるみ割り」としても有名です。

4月27日以降7月末までの間に、この呼びかけを受けて来道した被災者家族は約30人。プロジェクトの活動は現在も続いており、今も富良野に暮らしている子どもたち5人が18歳を迎えるまでの間、冬の暖房、防寒着の購入、甲状腺検査にあてる費用を募り、支援を続けています。

さて、このプロジェクトの事務局、富良野市役所近くの「暮（くら）しステーション」は、地域住民の社会参加の場としてカフェや多彩な学びの場などを提供しています。

2013年7月に東京から移住した吉田うららさんは、翌年「3・11に学ぶ@富良野」を立ち上げ、この場所を拠点に活動していました。映画上映会や講演会など学習会を重ねるうちに、富良野の自然に親しみながら子どもたちの保養支援をしようと考え、2015年10月、最初の「ふらのチャリティウォーク」を開催。2017年から同実行委員会で夏の保養受け入れを始め、今も続けています。

ドラマで使用した「くるみ割り」の看板と「暮しステーション」代表理事の浦田さん（左）、「ふらのチャリティウォーク」の吉田さん（右）

東川町編

2011年3月11日以降、インターネット上では、全国の避難受け入れ先情報をまとめたサイトや掲示板などが作られていました。こうした情報やSNSでのやりとりをきっかけに、避難者が増えていったところもあります。東川町はその一つです。

発災後、旭川市内の住職が、被災者支援情報の掲示板に「東川町のお寺にある空き家を2年間無償提供します」と書き込みました。それを見つけた福島県郡山市の家族5人が、5月2日にその一軒家へ避難してきました。

続いて5月20日、また郡山市から3人の母子が町営住宅に避難してきました。この家族が参考にしたのは、当時SNSに公開されていた、全国の避難先情報がまとめられたリストで、そこには東川町が行っていた住宅支援や避難費用補助などの受入支援内容も掲載されていました。前述の、先に避難をしていた家族とも避難前からSNSで繋がることができ、連絡を取り合っていたそうです。

11月には、郡山市の北隣、本宮市から家族5人が同町へ避難をしました。やはり、インターネットを通じて町が避難者受け入れに積極的だと知り、避難先に決め、町から紹介された空き家に避難しました。

その後もこうしたネット情報や口コミにより避難者が増え、最も多い時で20名（2012年2～6月）となりました。

東川町で避難者受け入れに尽力された平田章洋さん（当時、町の企画総務課総務室室長）。2023年に退職され、現在は㈱東川振興公社専務取締役として、「キトウシの森きとろん（町の温浴施設）」などでご活躍です。

情報募集

みなさんが避難した市町村地域で「ここではこんな支援があった！」という思い出がありましたら、入力フォーム（QRコード）から北海道NPOサポートセンターまでお寄せください。

電話、FAX、お手紙などでもお待ちしています！

寄稿　1ページのたより

故郷に戻って1年4ヶ月。自宅に戻ったわけでも実家に戻ったわけでもない。今まで縁のなかった町に住んでいる。偶然が奇跡を呼び、そこで日常を過ごしている。北海道で暮らした11年をそっと心にしまい、ここにいる。そして、30年以上振りに母と暮らし始めた。母と私と時々妹のポンコツ3人組で力を合わせて暮らしている。

私は自営業の家に生まれ育った。当然母はそこを切り盛りする立場だった。私が子どもの頃は、母には構ってもらえず兄妹3人で仲良くケンカしていた。母に怒られた記憶もない。優しいからではなくただ接触が少なかっただけだ。その頃の母の気持ちは知り得ないが、とにかく店の維持と接客のことで心も体も精一杯だったのだろう。今になればそうだろうと推察できる。

子どもの頃にはそんな余裕はなかった。寂しいとか甘えたいとか、形のある感情を持たないぼんやりした子どもだった私は、それほど母に執着することなく高校生まで実家で過ごした。実家を出てからもベタベタしない関係だった。母は相変わらず店のことで忙しい人だった。

そんな母が50年以上振りに「普通」の家で暮らし始めることになった。

母は息子と夫を立て続けに亡くし、店は閉めることを余儀なくされた。新たな地に居を構え、娘である私と2人暮らしを始めた。「普通の家庭」で生きるのは私のほうが先輩だ。家庭用のガスコンロの使い方や家庭料理、買い物の仕方、バスの乗り方など「普通」のことをたくさん指南した。「今までこんなことしたことないわ」が母の口からよく出ていた。初めの頃は「お母さんには無理。やったことないから」と言って、日常から逃げていた。しかし、ちょっとずつあれこれ覚え始めると調子が出てくる。そして、調子に乗る。

母の謎料理は発明レベルだ。「これ…何…？」恐怖混じりの質問をすることがたびたびある。今までで一番衝撃を受けたのは茶碗蒸しだ。蓋を開けたらピンク色だった。

「何入れたの？」

「え？ アーモンド。ぎんなんの代わり」

アーモンドが変色してピンク色になっていたのだ。北海道の甘い栗の入った茶碗蒸しに匹敵する衝撃だった。

その後も母の謎料理は続いており、私は度肝を抜かれている。母は意気揚々と新たなレシピを考えているようだ。母はほぼ初めての家庭料理をなんだかんだ楽しんでいる。

そして、これも初めての経験だが、丹精込めて庭を作っている。知人からお借りしているこの家には広くて素敵な庭がある。そこにせっせと花を植え、丁寧に草取りをしている。様々な悔しさや悲しさを、たくさんの初めての経験の喜びや楽しさに置き換えて、母は今を生きている。

私はもう少し北海道で暮らしたかった。そんな気持ちを抱えながら故郷に戻り、どこにも身の置き場のない「いずい」気持ちで過ごしている。それでも、ここまで苦労を重ね、新たに生き直している母を思えば、私が今ここで生きる意味もあるのだろう。私も母のように新たな地を開拓していこうと思う。私自身が11年前に北海道での生活を切り拓いていったように。

（匿名希望）

東日本大震災の影響により
道内に暮らしている方の

相談窓口

メールや FAX、
お手紙でも
ご相談ください

TEL 011・200・0973

NPO 法人 **北海道 NPO サポートセンター**

平 日 10：00~17：00
FAX 011・200・0974
info@hnposc.net

〒064-0808
札幌市中央区南 8 条西2丁目 5-74
市民活動プラザ星園 201

地下鉄東豊線「豊水すすきの駅」
6 番出口から徒歩約 7 分
地下鉄南北線「中島公園駅」
1 番出口から徒歩約 5 分

岩手県、宮城県、福島県が設置する
相談窓口はこちら。

岩手県
いわて被災者支援センター
電　話 019-601-7640（平日 9:00~17:00）
メール info@sumaiansin.net

宮城県
宮城県復興支援・伝承課　担当：大泉
電　話 022-211-2424
メール denshoh@pref.miyagi.lg.jp

福島県
ふくしまの今とつながる相談室 toiro
電　話 024-573-2731（月・水・金 10:00~17:00）
※祝祭日の場合は休み
メール toiro@f-renpuku.org

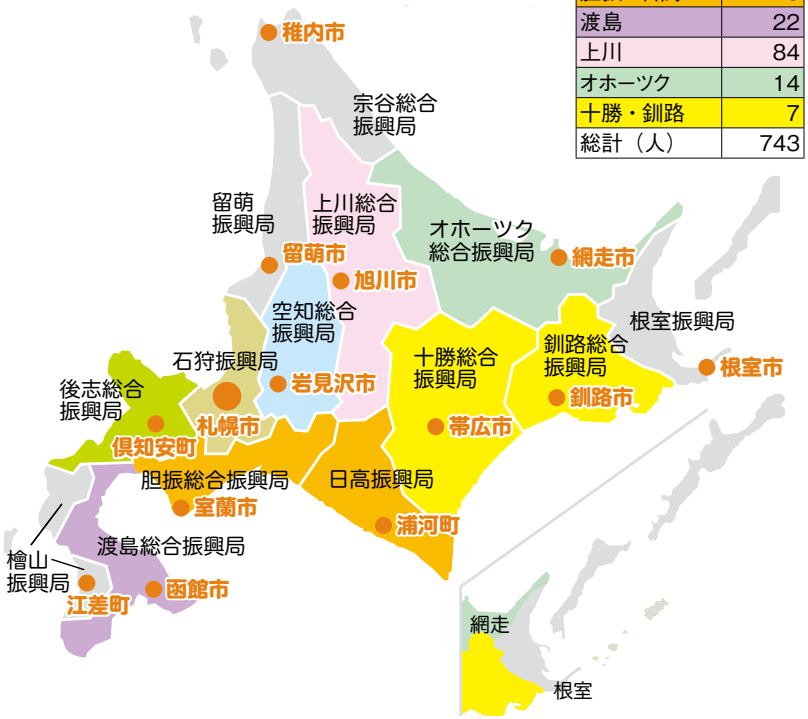
北海道における被災避難者の受入状況

下記の避難者数は、復興庁が公表している「避難元へ帰還の意思を確認できた方」の数です。なお、北海道庁では、さらに幅広く「ふるさとネット」（右記参照）に登録しているみなさまに、今後も引き続き、お知らせ（本紙）をお届けしてまいります。
〈からから便り郵送世帯数（避難元別）：岩手県16、宮城県63、福島県181、その他34
※2024年8月末現在〉

市町村別の受入状況は、北海道のホームページからご覧いただけます。▶

2024年８月1日現在

空知	27
石狩	507
後志	34
胆振・日高	48
渡島	22
上川	84
オホーツク	14
十勝・釧路	7
総計（人）	743



全国避難者情報システム「ふるさとネット」の登録について

「からから便り」は「ふるさとネット」の登録情報をもとに発送しています。「ふるさとネット」は北海道が運用する被災避難者サポート登録制度です。この制度は自治体の転出入届とは連動しておらず、転居の場合は住所変更のご連絡をいただかなければ、郵送物が「所在不明」として返送されてしまいます。転居、登録解除など、「ふるさとネット」の登録内容に変更がある場合はご連絡ください。

■連絡先
① NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター
②北海道総合政策部地域創生局地域政策課
　電　話：**011-206-6404**
　メール：**shienhonbu@pref.hokkaido.lg.jp**
③避難先市町村の担当窓口
（市町村により部署が異なります）

編集後記

先日、 北海道庁の前を通りかかったら、 改修工事中で取り外されていた赤れんが庁舎の八角塔が元の位置に取り付けられていました。 青銅色だった屋根はピカピカの銅板になり、 太陽の光をきらきら反射させていました。 雄勝石の屋根も、 全景を見るのが楽しみです。　（金榮）

道内避難者心のケア事業
ウェブサイト：https://hnposc.net/311_hokkaido

からから便り Vol. 2 ■ 2024 年 9 月 15 日発行
発行：NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター
〒064-0808 札幌市中央区南 8 条西2丁目 5-74 市民活動プラザ星園 201
電　話：011-200-0973　FAX：011-200-0974　メール：info@hnposc.net
委託元：北海道

お預かりした個人情報は、 避難者の生活支援のために利用するほか、 出身県への提供など限定した目的にのみ利用し、 その他目的には一切利用いたしません。

【無断転載・コピー】
本紙掲載の写真・図版・記事などを許可なく無断で転載することを禁じます。